

博士前期課程学生における進路選択とソーシャルスキルに関する考察
—進路選択自己効力感、ソーシャルスキル、進路選択能力の関係—

A Study of Career Choice and Social Skills in Master's Students

— Relationship Between Self-efficacy, Social Skills, and Career Selection Ability in Career Selection—

町 田 尚 史

MACHIDA, Hisashi

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要

第50号 2020年12月 抜刷

Journal of Humanities and Social Sciences

Okayama University Vol.50 2020

博士前期課程学生における進路選択とソーシャルスキルに関する考察 ——進路選択自己効力感、ソーシャルスキル、進路選択能力の関係——

町 田 尚 史

1. 問題意識と研究目的

令和元年度文部科学省学校基本調査（速報値）によれば、我が国の博士前期（修士）課程修了者のうち10.6%にあたる7,759名もの学生が就業しない、もしくは正規の仕事を得ないままに卒業（修了）している。4年生大学卒業者に関して10年前の平成22年度と比較した場合、就業しない、もしくは正規の仕事を得ないままに卒業している割合は、景気回復に伴い19.7%から8.1%と大幅に減少しているが、博士前期課程修了者は同時期において13.4%から10.6%と微減に留まっている。景気回復の中で新卒の求人倍率が上昇しているにもかかわらず、大学院博士前期課程ではなぜ就職しない修了者が多数存在するのか。また彼らは何故就職しないのかについて関心が及ぶ。

就職すなわち職業選択を進路選択ととらえた時、なぜ学生が進路選択をしないのか、もしくはできないのかに関し、大学生を対象に筆者は、町田（2014）、町田・開本（2016）において明らかにしてきた。そこでは就職活動を推進する進路選択行動は進路選択能力に影響を受けるが、進路選択自己効力感が媒介することにより、より大きな正の影響を受けるという概念である（富永,2009）。

自己効力感とは「自分是可以る」という自らへの信頼感情であり（Bandura,1977）、効力期待と結果期待から構成される。進路選択における自己効力感については、進路選択過程における自己効力感など多様な研究がなされている（廣瀬,1998）。また進路選択行動に影響を及ぼすもう一つの因子である進路選択能力についても、「何が」進路選択能力であるのかについて町田・開本（2016）が明らかにしている。このような背景から、筆者は進路選択能力、進路選択自己効力感、進路選択行動の上記関係を前提にした際に、町田・開本（2016）が明らかにした進路選択能力以外に大学生の進路選択自己効力感に影響を及ぼす因子は何かについて探索した（町田・開本,2017）。その際に大学生の進路選択行動が主に就職行動であると考えられ、それは広い意味で社会参加行動であると認識した場合、楠奥（2007）、楠奥（2009）や北見・森（2010）が明らかにしたソーシャルスキル（社会的スキル）と進路選択について考察することが必要であると考えられた。そのため進路選択能力、進路選択自己効力感とソーシャルスキルの関係について44名の大学生を対象としたデータにより分析し、ソーシャルスキルが大学生の進路選択自己効力感にポジティブな影響を与えている事がわかった。

本稿では調査対象者を大学院博士前期学生とする。就職活動を控えた大学院博士前期課程1年生を対象に質問紙によるアンケートを実施し、博士前期課程学生における進路選択自己効力感、ソー

シャルスキル、進路選択能力がどのような関係性を持っているのかについて分析していく。

2. 先行研究から分析モデルの構築

2.1 進路選択能力と進路選択自己効力感

進路選択行動には進路選択自己効力感が大きく影響を与えており、進路選択における自己効力感が高い学生ほど、進路選択行動が適切に行われ、進路不決断が回避される傾向が高いとされている(富永,2008)。自己効力感の概念を進路選択の領域に本格的に持ち込んだのが、Taylor & Betz(1983)であり、進路選択自己効力感(CDMSE)を5つの領域に分類し尺度設定した。5つの領域とは、①自己評価、②職業情報の収集、③目標選択、④将来設計、⑤問題解決である。彼らの研究によりキャリア開発や職業意思決定過程の議論に対し、進路選択自己効力感という明確な指標が導入されたことは研究上大きな進展であったといえる。Taylor & Betz(1983)は進路選択自己効力感を規定するのみならず、進路選択行動に大きな影響を及ぼす進路選択能力についても示唆している。CDMSEの5領域は職業成熟のCrites(1961)モデルで仮定される5つの職業選択コンピテンシーを示す性質(成長、探索、確立、維持、離脱)により定義されている。ただそれ以前は進路選択能力に関する研究は乏しく、研究は進路不決断とその原因についての研究が中核であった(町田・開本,2016)。

そのような中で町田・開本(2016)では進路選択能力を進路選択スキル、進路選択マッチング、進路選択モチベーションの3因子に分類し、同時に進路選択マッチング、進路選択モチベーションの2つの因子が大学生の進路選択自己効力感にポジティブな影響を与えている事を明らかにしている。

進路選択スキルとは進路選択において必要な情報収集や自己認知、課題解決に関わる技術である。また進路選択マッチングとは自己認知により得られた自己の能力の正確な把握と、業種や職種などの企業、職業情報収集による自らの志向や価値観との適合性に関する判断力である。進路選択モチベーションとは、職業情報に関する興味関心対象に関して、自ら意欲を高め進路選択行動を繰り返す力である。このようにして進路選択自己効力感を媒介して進路選択行動に正の影響を与える進路選択能力が明らかにされた。

2.2 ソーシャルスキル

相川(1996)によれば、ソーシャルスキルとは、対人場面において適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的・非言語的な対人行動とそのような対人行動の発現を可能にする認知過程との両方を包含する概念であるとしている。

ただ相川(1996)はソーシャルスキルの定義に関してはいまだに統一的なものがないとしており、
(a) 具体的な対人場面で用いられるもの

(b) 対人目標を達成するために使われるもの（対人目標とは、当該の対人場面から手に入れたと思う成果のことである）

(c) 相手の反応の解釈や対人目標の決定感情の統制などのような「認知過程」と対人反応の実行という「行動過程」の両方を含むもの

(d) 言語的ないしは非言語的な対人反応として実行されるもの

(e) 学習によって獲得されたもの

(f) 自分の対人反応と他者の反応とをフィードバック情報として取り入れて、変容してゆくもの

(g) 慣れない社会的状況では意識的に実行されるが、熟知した状況では自動化しているものなどの要素を含んだものであると述べている（相川,1996）。

その上で、「コミュニケーション・スキル」と「対人スキル」の2つの側面から同時に測定できるソーシャルスキル尺度が必要であると考え、関係開始、解釈、主張性、感情統制、感情維持、記号化の6因子から構成されるソーシャルスキル自己評定尺度を設定した（相川,1996）。

筆者は中国地方の国立大学において主に大学院学生及び大学生の教育活動並びにキャリア開発業務に従事している。大学入学以降5年以上の長期間にわたり研究活動を行ってきた大学院博士課程学生は、専門的な知見に優れているが、必ずしも対人関係能力、コミュニケーション能力に優れている学生ばかりでは無い。一方日本経済団体連合会の【2016年度新卒採用に関するアンケート調査結果】において、【採用選考において最も重視した点】のトップは、13年連続で【コミュニケーション能力】であり、その割合は87.0%と9割近くの企業が最も重視していると回答している。筆者が日頃接している博士課程学生のみならず、大学生・大学院生全般において、青年の対人関係が希薄化していることが、岡田（1995）や落合・佐藤（1996）以降重ねて指摘されている。上述のように民間企業の多くがコミュニケーション能力を選考で重視しながら、社会のICT化やスマホ等のツールの進化、核家族化の進行などにより直接的な人間関係が希薄となり、対人関係能力が後退しているとするれば、進路選択とソーシャルスキルには自ずと相関関係が生じざるを得ないと考えられる。それらの状況を踏まえて町田・開本（2017）では、進路選択自己効力感、進路選択能力とソーシャルスキルの関係を分析し、大学生においてソーシャルスキルが進路選択自己効力感に正の影響を与えていることを明らかにした。

2.3 進路選択自己効力感とソーシャルスキルの関係

ソーシャルスキルは我が国では社会的スキルとも呼ばれ、自己効力感との関係についていくつかの研究が進んでいる。野崎・布佐・三浦・千田（2002）においては看護大学生を対象として社会的スキルと自己効力感について調査し、社会的スキルと自己効力感の相関関係が高く、とりわけ自己効力感の強弱に左右される行動の積極性が社会的スキルに影響していると記述している。また戸ヶ崎・坂野（1997）においては小学生を対象にした調査を行い、自己効力感が高い学生ほど「向社会

性スキル」、「主張性スキル」、「社交性スキル」が高くなり、「負の社会性スキル」が減少することを報告している。

ただ進路選択自己効力感とソーシャルスキル（社会的スキル）の関係については、まだ研究が乏しい。浦上（1996）はその先駆けであるが、表題の通り「予備的研究」に留まっている。楠奥（2007）では、授業を通じて社会的スキルが向上した津村（2002）の事例を前提としながら、進路選択自己効力感を高めるソーシャルスキル・トレーニングプログラムの試案が提示されている。その後楠奥（2009）においては経営学の講義受講者451名に対し、質問紙により進路選択自己効力感とソーシャルスキルの関係について調査している。この研究では進路選択自己効力感の尺度は浦上（1995）の尺度を、ソーシャルスキルについては菊池（1988）のKiSS-18を使用している。「十分な検証が得られたわけでは無いので、必ずしも進路選択自己効力感を高めた要因が社会的スキルとは言えない」としながらも、ソーシャルスキル（特に、「積極的な会話スキル」、「自己統制スキル」、「ストレスマネジメントスキル」）が高くなれば、進路選択自己効力感が高くなるという仮説を支持するような示唆が得られたとしている。また澤聡一（2018）では大学1年生から4年生までの自己効力感とソーシャルスキルを測定し、「コミュニケーション・スキルと進路選択に対する自己効力の間には密な関連があることが示された」との結論を導いている。

ただいずれにしても、進路選択自己効力感とソーシャルスキルに関係する研究、とりわけ大学院生に関する研究は乏しく、大学生における調査でも楠奥（2009）は「CDMSE（進路選択自己効力感）を高めるための具体的方法を見出せずにいる。」という記述をしている。そのため本稿では、以下の仮説を導出し検証する。

仮説. ソーシャルスキル（社会的スキル）は大学院博士前期課程学生の進路選択自己効力感に正の影響を与える。

3. 分析方法・対象とその結果

3.1 調査方法・対象・サンプル数

本研究の調査は、2019年10月下旬に実施した。中国地方にある国立大学で「教養・実践論」という講義を受講した自然科学系大学院博士前期課程学生に対し、質問紙によるアンケートを実施した。進路選択自己効力感、進路選択能力、ソーシャルスキルの各指標における定量アンケートとした。進路選択自己効力感については浦上（1995）による進路選択に対する自己効力尺度30項目版を使用した。浦上（1995）においては4点尺度にて尋ねているが、本研究の調査では他の尺度を含めてすべて5点尺度で尋ねている。進路選択能力に関する尺度は、町田・開本（2016）による16項目から構成される進路選択能力尺度を使用した。またソーシャルスキルにおける尺度は、相川・藤田（2005）における成人用ソーシャルスキル自己評価尺度を使用した。また回答者はすべて大学院博士前期課

程学生1年生であり、欠損値を除いた33名を分析対象とした。また回答者の属性をコントロールする変数として、男子学生ダミー、自宅通学ダミー、民間企業志望ダミーの各変数を設定した。この「教養・実践論」という講義は博士前期課程学生に対し、広く社会で活躍するための知見を付与する講義である。この講義では授業中と授業後に課題レポートを作成させた。また授業中の映像視聴後に、個々人に教室内でインタビューして感想を聞く、ペアもしくはグループワークなどで個々人の意見を聞き取る、及びその意見を発表させる場を毎回設けた。この講義では映像視聴による「聞き取る（映像から読み取る）」、「（自分で）考える」、「（自分の意見を）話す」、「（価値観の異なる人と）対話する」、「（多くの人の前で）発表する」ことを副次的な教育目的とした。質問紙によるアンケートは趣旨説明の上、2019年10月の第4回目講義中に実施した。

3.2 分析結果

3.2.1 各変数の平均値・標準偏差・度数・ α 係数及び相関係数

測定した3変数の平均値、標準偏差、度数Cronbach の α 係数を表1の通り算出した。いずれの尺度とも十分な内的整合性を有すると考えられる。

表1. 各変数の平均、標準偏差、 α 係数

	平均値	標準偏差	度数	α 係数
進路選択自己効力感	3.29	0.57	33	0.93
ソーシャルスキル	3.18	0.52	33	0.91
進路選択能力	3.19	0.62	33	0.89

またダミー変数を含めた各因子の相関係数は表2の通りである。

表2. 尺度間の相関係数

	ソーシャル スキル	男性 ダミー	自宅 ダミー	民間志望 ダミー	進路選択 自己効力感	進路選択 能力
ソーシャル スキル	1	-0.092	-0.117	-0.19	0.723**	0.558**
男性ダミー		1	0.151	0.341	-0.01	-0.003
自宅ダミー			1	0.108	-0.079	0.025
民間志望 ダミー				1	-0.049	-0.109
進路選択 自己効力感					1	0.919**
進路選択 能力						1

** $P < .01$

3.2.2 ソーシャルスキルが進路選択自己効力感に与える影響

大学院博士前期課程学生にソーシャルスキルが、進路選択自己効力感にどのように影響を与えるかを検証するため、前者を独立変数に、後者を従属変数にした階層的重回帰分析を行った。まず進路選択自己効力感に影響を及ぼすと考えられる性別、自宅通学、民間企業志望といった属性変数についてステップ1で投入し、その後ソーシャルスキル及び進路選択能力の変数をステップ2で投入した。結果は表3のとおりである。重回帰分析により判明したことは第1に、ダミー変数はすべて有意な関連を示しておらず、性別などの属性変数は進路選択自己効力感に影響を与えていないことが確認できた。第2に、進路選択自己効力感に対して、ソーシャルスキルが有意にポジティブな回帰係数を有していることが確認できた。ソーシャルスキルは進路選択能力ほどではないが、進路選択自己効力感に対し正の影響を与えていることが明らかになった。したがって仮説は支持される結果となった。

表3. ソーシャルスキルが進路選択自己効力感に与える影響の重回帰分析結果

	ステップ1		ステップ2	
	β	t	β	t
独立変数				
男性ダミー	0.02	0.09	0	-0.05
自宅ダミー	-0.08	-0.41	-0.07	-1.32
民間志望ダミー	-0.05	-0.23	0.1	1.76
進路選択能力			0.76	11.69***
ソーシャルスキル			0.31	4.70***
R^2		0.09		0.92***
ΔR^2		0.08		0.91***
従属変数：進路選択自己効力感				
*** p < .001				

4. 考察と結論

本稿では、ソーシャルスキルが大学院博士前期課程学生が進路選択自己効力感に与える影響について実証的に分析してきた。本稿で考察した分析枠組みにしたがって、明らかになった事実を以下の通りまとめる。

第1にソーシャルスキルが大学院博士前期課程学生が進路選択自己効力感にポジティブな影響を与えている事がわかった。第2に男子学生ダミー、自宅通学ダミー、民間企業志望ダミーというダミー変数にはいずれも有意な相関関係がみられなかった。これらは、大学生に関する同様の調査である町田・開本（2017）の結果とも整合する。

次に本稿から得られた含意と課題を整理する。理論的含意としては、ソーシャルスキルが進路選択自己効力感に正の影響を与えていることが挙げられる。また本稿においては、従来の研究通り進路選択能力が進路選択自己効力感に強い正の影響を与えていること、一方男女間の性差、自宅・下

宿通学の差及び志望先の差による特性の間に相関関係はないことが明らかにされた。

従来就職活動という進路選択の場面における進路選択自己効力感の重要性について繰り返し指摘されていたにもかかわらず、これまで進路選択自己効力感を向上させる因子が進路選択能力に限定され、ソーシャルスキルを向上させる教育が進路選択自己効力感に正の影響を与えることに関する実証研究は非常にまれであった。とりわけ博士前期課程学生に関する研究は極めて少ない。この点について、本稿では幾ばくかの理論的貢献ができたと考える。

上述の通りこの調査は大学院博士前期課程の10月に実施された。大学院博士前期課程学生は大学の学部卒業前に就職か進学かの選択活動を行う中で、進路選択についての認識、理解が促進されており上記結果に繋がったとも考えられる。就職活動の前段階において、キャリア教育などで正しい自己認知と社会及び会社などの組織理解及び職業選択における適性の把握と、働く事への前向きな意識構築を図る事が重要となると考えられる。と同時に進路選択能力に影響を与える進路選択自己効力感に対してソーシャルスキルがポジティブな影響を与えることが判明する中で、対人関係能力及びコミュニケーション能力に関しても教育的見地から十分な配慮が行われるべきであると考ええる。

最後に今後の研究上残された課題を指摘する。まずソーシャルスキルを開発する教育システムである。今回は講義の中で副次的にソーシャルスキル向上を取り入れたプログラムであったため、ソーシャルスキルに必ずしも大きな向上が図られなかった可能性がある。

また大学院博士前期課程学生でも自然科学系以外の学生を対象にした場合どのような結果が得られるのかも今後の課題となる。また大学生のソーシャルスキルと進路選択自己効力感に関する研究との比較も必要となる。これらの課題については、継続的な調査を行い、改めて別の機会に報告したい。

参考文献

- Bandura, A. (1977) . Self-efficacy: toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological review*, 84 (2) , 191-215.
- Crites, J. O. (1961) . A model for the measurement of vocational maturity. *Journal of counseling psychology*, 8 (3) , 255-259.
- Taylor, K. M., & Betz, N. E. (1983) . Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, 22 (1) , 63-81.
- 相川充 (1996) . 社会的スキルという概念 相川充・津村俊充（編）社会的スキルと対人関係-自己表現を援助する（pp.3-21）誠信書房
- 相川充, & 藤田正美. (2005) . 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成. *東京学芸大学紀要. 第1部門, 教育科学*, 56, 87-93.
- 浦上昌則. (1995) . 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究.

- 浦上昌則. (1996). 進路指導研究: 日本進路指導学会研究紀要17 (1), 17-27, 1996-11-01 日本キャリア教育学会
- 岡田努. (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察. 教育心理学研究, 43 (4), 354-363.
- 落合良行, & 佐藤有耕. (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化. 教育心理学研究, 44 (1), 55-65.
- 菊池章夫. (1988). 思いやりを科学する: 向社会的行動の心理とスキル. 川島書店.
- 北見由奈, & 森和代. (2010). 大学生の就職活動ストレスおよび精神的健康とソーシャルスキルとの関連性の検討. ストレス科学研究, 25, 37-45.
- 楠奥繁則. (2007). 文科系大学生における進路選択過程に対する自己効力と社会的スキル-キャリア教育における手がかりの探究. 立命館経営学, 46 (3), 99-121.
- 楠奥繁則. (2009). 大学生の進路選択セルフ・エフィカシー研究: KiSS-18 からのアプローチ.
- 津村俊充. (2002). ラボラトリ・メソッドによる体験学習の社会的スキル向上に及ぼす効果-社会的スキル測定尺度 KiSS-18 を手がかりとして. アカデミア 人文・社会科学編, (74), 291-320.
- 富永美佐子. (2008). 進路選択能力および進路選択自己効力が進路選択行動に与える影響-高校生・大学生の発達差の検討. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 56 (2), 163-167.
- 富永美佐子. (2009). 進路選択能力, 進路選択自己効力, 進路選択行動の関連: 中学生・高校生・大学生を対象に 福島大学人間発達文化学類論集 (10), 39-4.
- 戸ヶ崎泰子, & 坂野雄二. (1997). 母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響. 教育心理学研究, 45 (2), 173-182.
- 日本経済団体連合会 2016年度新卒採用に関するアンケート調査結果
- 野崎智恵子, 布佐真理子, 三浦まゆみ, & 千田睦美. (2002). 1 年間の経過からみた看護大学生の社会的スキルと自己効力感, 生活体験の関連. 東北大学医療技術短期大学部紀要, 11 (2), 237-243.
- 廣瀬英子. (1998). 進路に関する自己効力研究の発展と課題. 教育心理学研究, 46 (3), 343-355.
- 町田尚史. (2014). 進路選択自己効力を高めるキャリア教育の成果と課題. 経営行動科学学会年次大会: 発表論文集, (17), 169-174.
- 町田尚史, & 開本浩矢. (2016). 進路選択能力の構造に関する考察: 進路選択能力と進路選択自己効力感との関係. 商大論集, 67 (3), 225-238.
- Machida, H., & Hirakimoto, H. (2017). ソーシャルスキルが進路選択に与える影響に関する実証分析. Discussion Papers In Economics And Business Graduate School of Economics and Osaka School of International Public Policy (OSIPP) Osaka University, 1-14.
- 文部科学省 令和元年度文部科学省学校基本調査 (速報値)

澤聡一. (2018). 大学生のコミュニケーション・スキルと進路選択に対する自己効力との関連. 北
翔大学教育文化学部研究紀要 = Bulletin of Hokusho University School of education and culture
department, 3, 157-172.

